



Title	室町期山名氏の政治史的研究
Author(s)	伊藤, 大貴
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/81959">https://hdl.handle.net/11094/81959</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏名(伊藤大貴)	
論文題名	室町期山名氏の政治史的研究
論文内容の要旨	
<p>本論文は、室町幕府を構成した在京守護（大名）家の政治動向について、15世紀を中心に考察することを目的とするものである。特に本論文では、有力守護家の一員であった山名氏を素材に検討した。</p> <p>序章「問題の所在と本論文の課題」では、室町期政治史における守護の位置づけについて先行研究を整理し、本論文の課題を抽出した。室町期政治史における課題を整理すると、当該期の政治史上、枢要な位置にあった守護については個別具体的な専論が乏しい状況であることが浮き彫りとなった。そこで本論文では守護の視点から室町期政治史を考察するが、近年の室町期研究で重視される京都との関係を基軸に15世紀を通時的に見通すという大きな方向性を示した。続いて15世紀後半の政治状況とその研究史を見ると、応仁・文明の乱を境に守護が在京する政治構造が崩壊へと向かい、中央政権が段階的に変化していくが、依然として畿内政治史の検討対象から漏れた大名家も存在している。この間の守護を取り巻く都鄙の政治情勢を考察することで、16世紀前半の政治状況の前提が形成されていく具体的な過程を明らかにする必要があろう。これらの課題を踏まえた上で有力守護家の一員であった山名氏に視点を設定し、まず、山名氏の概要と研究上の意義を述べた。次に山名氏研究の現状を確認した上で、本論文において重視する政治史分野の研究が手薄な状況を指摘し、室町期山名氏の政治動向を見るための課題と目標を提示した。</p> <p>まず、第1部「室町期政治史と山名氏の動向」では14世紀末から15世紀半ばにかけての山名氏の政治動向を検討した。第1章「明徳の乱と山名氏」では、明徳2（1391）年に起きた明徳の乱を取り上げた。従来の政治史理解では足利義満の謀略による山名氏挙兵と有力守護の勢力削減が語られ、義満が強大な権力を確立する過程を自明視してきた。しかし、実際の政治過程はそう単純な図式で理解できず、様々な紆余曲折を経て予期せぬ形で明徳の乱が生成し、数年かけて鎮静化していった。必ずしも足利義満が完全に優位な立場ですべての物事を進めていたとは断言できないこと、乱後の山名時熙は義満の戦後処理策を背景とする形で一族を糾合して勢力回復を果たした点などを指摘した。また、足利義満の権力確立を所与のものとして自明視せず、室町殿・守護双方の視点や同時代史料を踏まえた上で当該期政治史を再構築していく必要性を提示した。</p> <p>第2章「南北朝・室町期の山名氏と被官山口氏」では、山名惣領家被官の山口氏を素材に考察した。近年、守護被官の活動、被官編成の問題を京都との諸関係をもとに解明する動きが顕著であるが、山名氏分野ではいまだ不明な点が多い。本章では被官山口氏が京都で権力編成された過程を明らかにし、その出自が將軍近習であったことを指摘した。さらに時熙期の山口氏は主人・時熙の在京活動を補佐し、永享年間にかけて急速に台頭していったが、時熙が死去すると山名惣領家の中枢部から排除されて重臣層には定着できなかった。これは山名持豊の家督継承をめぐる政治状況と密接に連動しており、時熙から持豊へ移行する時期の様相を新たに示した。</p> <p>第3章「山名教豊・是豊兄弟の政治的位置」では、嘉吉の乱～応仁・文明の乱にかけての時期を対象として、惣領・山名持豊の子息の動向を追った。本章では教豊・是豊兄弟の基礎的な考察を加えつつ、中央政界の動向を踏まえて両者の動きを見直したが、両者は概ね父持豊と細川勝元の協調関係に基づいて動く存在であった。とりわけ是豊の動向については従来の政治史理解とは異なる見方を指摘した。また、応仁・文明の乱に至る政治過程において山名氏内部は必ずしも一枚岩とは言えない状況であり、持豊の強力な一族被官の統制を強調する近年の議論に対して疑問視する立場を示した。筆者も山名氏の一族間結合を否定するわけではないが、段階的に変化する都鄙の政治情勢を踏まえる必要がある。さらに山名氏内部に存在した不安定要素は、次の第2部第4章で指摘するような応仁・文明の乱中の山名氏の動向にも影響を与えるものであったといえるだろう。</p> <p>次いで第2部「応仁・文明の乱以降の山名氏をめぐる都鄙の政治情勢」では、応仁・文明の乱～明応の政変にかけての時期を中心に山名氏の政治動向の展開を検討した。</p> <p>第4章「応仁・文明の乱と山名氏」では、応仁・文明の乱中の山名氏の動向を庶子家も含めた一族関係の視点で検討した。応仁・文明の乱をめぐる先行研究では、乱終結に至る政治過程の研究が、開戦に至る政治過程論と比べると乏</p>	

しい状況であった。本章では、これまで山名氏研究分野では見過ごされてきた「昔御内書符案」所収「足利義政御内書案写」をもとに応仁・文明の乱における山名氏の内部分裂の具体的な過程を明らかにしたが、本史料の分析により、文明3（1471）年に山名氏の内部分裂が深刻化したことが判明した。加えて、この内部分裂は文明4（1472）年から本格化する東西両陣営の和睦交渉にも影響を与えており、山名氏がいち早く東軍と和睦する背景の一つに数えられる点を指摘した。また、内部分裂に伴う混乱と乱中に赤松氏に奪われた分国回復という二つの要素は乱後の山名氏の動向を規定していったと考えられる。

第5章「応仁・文明の乱後の山名氏と室町幕府」では、第2部第4章を受けて乱後の山名惣領家の展開を考察した。応仁・文明の乱後の山名惣領家はしばらく在京を続けていたが、庶子家分国の混乱を受けて在国するに至った。その後、惣領家は分国奪回と惣領家への求心力の回復を目指して赤松氏と抗争を繰り広げたが、撤兵を余儀なくされた。撤兵をめぐる内部紛争が生じると、足利義材政権と結んだ新当主が擁立されたように中央情勢と関連した動きが展開したのである。明応の政変で義材が追放されると、山名氏内部でも義材派が没落し、義澄新政権と結び付いた前当主・政豊が復権した。足利義尚・義材両政権との関係を受けて、応仁・文明の乱以来続いた山名氏をめぐる政治的課題が清算され、戦国期に頻発する対立関係が新たに出来していく様子を明らかにした。

第6章「因幡守護山名豊時・豊重父子と室町幕府」では応仁・文明の乱後の因幡守護山名豊時・豊重父子の動向を当時の都鄙関係の中に位置づけて考察した。中央政界の動きに応じて因幡守護山名氏をめぐる情勢が段階的に変化する中で豊時・豊重父子は連携しつつ行動した様子を明らかにした。元来、国内基盤が脆弱で惣領家の影響下にあった豊時・豊重父子は京都との関係を重視する一方で、反守護争乱を鎮圧して、豊富な在京経験をもとに自らの基盤を都鄙間で構築していった。第2部第4章で示した庶子家分国の混乱を受けて因幡情勢の展開過程を考察したものだが、第2部第5章と同時期の庶子家が幕府・惣領家の間で揺れ動く様子、戦国初期の因幡国内で豊時流が足場を固める背景もあわせて示した。

第7章「応仁・文明の乱後における石見守護山名氏の動向」では、さらに別の庶子家である石見守護家を取り上げた。応仁・文明の乱を境に石見国は隣の大内氏の影響下に置かれたとされるが、大きく在地の政治状況が変化する中で石見守護家はどのように展開したのかという点を考察した。通説では、石見守護家は応仁・文明の乱で没落したとされるが、実際には関係史料が断片的に残存しており、これらの史料をもとに戦国初期にかけての石見守護家の動きを明らかにした。本章では、応仁・文明の乱後に実体を失いつつあった石見守護山名氏が自らを庇護する存在を求めて動いたことを明らかにしたが、特に血縁上近い存在であった大内氏の支援を求める動きを見せた点が特徴的であった。従来の研究では応仁・文明の乱後の石見守護家の動向は等閑視されていたが、守護家と国人双方が大内氏を石見国内に引き込むことで戦国期特有の新たな政治状況が生み出されていった過程を示した。

終章「本論文の成果と今後の課題」では、これまで述べてきた章ごとの内容をまとめた上で本論文の成果と今後の課題を述べた。

第1部の成果から見えてくるのは、近年は室町期研究が盛況とはいえ、いまだ政治史研究はモザイク状で不十分さが否めない点である。結果を安易に遡って適用せず、室町殿・守護双方の立場から政治史を再構築する必要があろう。本論文では、応仁・文明の乱以前の政治史においては將軍権力側の動向を自明視せず、中央政界構成員である守護の動向を踏まえながら、より多角的な側面から政治史を再検討しなければならない点を強調しておきたい。

続いて応仁・文明の乱以後の政治情勢を捉えた第2部では、それまで在京していた守護家がどのように展開して戦国期を迎えたのかという点を具体的に示した。第2部の成果からまず見えてくるのは、家ごとの動向が大きく異なる点である。京都から分国に拠点を移していく中で守護家を規定する要素も地域ごとの差異が大きくなっていく様子がうかがえる。それぞれの地域が持つ独自性が大きくなり、地域権力側は中央情勢からの乖離と連動を繰り返しながら展開していくといえる。今後は、応仁・文明の乱から明応の政変に至る約30年の期間を戦国期に向けた「過渡期」として議論の中に積極的に位置付けなければならないことを指摘しておきたい。

特に本論文では山名氏を素材に15世紀の政治史を考察したが、室町期社会の中で枢要な位置付けを与えられたにもかかわらず、守護の基本的な政治動向には依然として課題が多い状況が改めて明るみになったといえる。もちろん室町期の政治体制の評価、個別分散的な研究動向を総括した全体論が重要なことは言うまでもないが、根幹となるはずの政史に不十分さが見られる点は室町期研究の盲点とも言わなければならない。1990年代以降に進展した権力論・支配体制論は大きな骨格として位置付けられる一方、その骨格に肉付けしていくような個別事例の積み重ねが改めて必要な段階に入っているといえよう。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 伊藤 大貴 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主査 大阪大学 教授 川合 康 副査 大阪大学 教授 市 大樹 副査 大阪大学 准教授 野村 玄
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 室町期山名氏の政治史的研究

学位申請者 伊藤 大貴

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	川合 康
副査	大阪大学教授	市 大樹
副査	大阪大学准教授	野村 玄

【論文内容の要旨】

本論文は、室町幕府を構成した在京守護（大名）家の政治動向について、15世紀を中心に有力守護家の一員であった山名氏を素材に考察し、室町期政治史を守護の視点から再検討しようとしたものである。全7章と序章・終章からなり、枚数は約575枚（400字詰め換算）である。

序章「問題の所在と本論文の課題」では、室町期政治史における守護の位置づけと、山名氏をめぐる研究史を整理したうえで、室町幕府のもとでの山名氏の活動を京都と分国の関係を軸に通時的に見通すとともに、応仁・文明の乱を境に中央政権が段階的に変化するなか、山名氏惣領家・庶子家が戦国期に向けてどのような展開を示していくのかについて、具体的に明らかにすることを本論文の課題として設定する。

第一部「室町期政治史と山名氏の動向」では、14世紀末から15世紀半ばにかけての山名氏の政治動向を検討した。第一章「明徳の乱と山名氏」では、明徳2年（1291）に勃発した明徳の乱について、將軍足利義満が権力確立の過程で行った守護大名山名氏の勢力削減策とする通説的理解を再検討し、実際の政治過程では予期せぬ形で乱が勃発し、数年をかけて鎮静化したこと、また必ずしも義満が優位な立場で軍事行動を進めたとは理解できないこと、さらに乱後の山名時熙は、義満の戦後処理策を背景に一族を糾合し、勢力を回復したこと、などを指摘した。

第二章「南北朝・室町期の山名氏と被官山口氏」では、山名惣領家被官の山口氏を取り上げ、將軍近習であった山口氏が京都で被官化された過程を明らかにし、山口国衡が主人時熙の在京活動を補佐し、永享年間にかけて急速に台頭したものの、時熙死去後は山名惣領家の中枢部から排除され、家督を継承した山名持豊のもとで重臣層に定着できなかったことを明らかにした。

第三章「山名教豊・是豊兄弟の政治的位置」では、嘉吉の乱から応仁・文明の乱にかけての時期における惣領山名持豊の子息教豊・是豊の動向を追究し、父持豊と細川勝元の協調関係に基づいて活動していた両者が、応仁・文明の乱にいたる政治過程において、畠山義就追討をめぐってそれぞれが独自の動向を示すようになることを明らかにし、持豊の強力な一族統制を強調する近年の議論に疑問を提示した。

第二部「応仁・文明の乱以降の山名氏をめぐる都鄙の政治情勢」では、応仁・文明の乱から明応の政変にかけての時期における山名氏の政治動向の展開を検討した。第四章「応仁・文明の乱と山名氏」では、応仁・文明の乱における山名氏の動向を、庶子家も含めた一族関係の視点で検討し、これまでの研究では見過ごされてきた「昔御内

書符案」所収「足利義政御内書案写」に基づいて、文明3年（1471）に山名氏庶子家の多くが西軍方から東軍方に転向したことを明らかにし、赤松氏によって侵攻された分国を回復して一族の再結集をはかるために、山名惣領家が翌文明4年から東軍との和睦交渉に乗り出したことを論じた。

第五章「応仁・文明の乱後の山名氏と室町幕府」では、応仁・文明の乱後、惣領山名政豊が但馬に下向し、赤松氏と抗争を繰り広げるも、撤兵を余儀なくされたこと、さらに撤兵の際に内部紛争が生じると、足利義材政権と結んだ新当主俊豊が擁立されたが、明応の政変で義材が追放されると、山名氏内部でも義材派が没落し、義澄新政権と結んだ前当主政豊が復権したことを論じ、戦国期に特徴的な対立関係が生み出されてくる様相を明らかにした。

第六章「因幡守護山名豊時・豊重父子と室町幕府」では、応仁・文明の乱後の因幡守護山名豊時・豊重父子が、京都において幕府や惣領家との関係を重視する一方で、分国内での争乱鎮圧にあたり、自らの基盤を都鄙間で構築していく様相を明らかにし、戦国初期に因幡国内で豊時流が足場を固める背景を示した。

第七章「応仁・文明の乱後における石見守護山名氏の動向」では、応仁・文明の乱で没落したとされる石見守護家を取り上げ、石見守護山名氏が姻戚関係にある大内氏の支援を求める動きを見せたことを明らかにし、守護家と国人の双方が大内氏を石見国内に引き込むことによって、戦国期の新たな政治状況が生まれたことを論じた。

終章「本論文の成果と今後の課題」では、これまで述べてきた本論文の成果をまとめたうえで、將軍足利義持・義教期の山名氏の動向の追究や、戦国期山名氏の活動を畿内政治史に位置づけることなどを、今後の課題とした。

### 【論文審査の結果の要旨】

本論文の第一の成果は、室町幕府を構成した有力守護家である山名氏に焦点を当てて、14世紀末の明徳の乱から応仁・文明の乱の勃発と終結、そして15世紀末の明応の政変にいたるまでの室町期政治史を、通時的に見通すことに成功した点である。特に山名氏惣領家・庶氏家の関係である「同族連合体制」と、京都と分国の都鄙間のネットワークが、段階的に変化していく様相を明確化し、それを踏まえて守護家山名氏の政治的動向を明らかにした点は、研究史上大きな意義をもつものと評価される。

第二の成果は、これまで膨大な研究史が積み重ねられてきた応仁・文明の乱について、その勃発から展開、和睦・終結にいたるまで政治過程を、従来全く検討されることのなかった「昔御内書符案」所収「足利義政御内緒案写」などの新史料や、山名氏にとっての赤松氏分国がもつ意義に注目することによって、全く新しい水準で詳細に論じた点である。山名氏の個別研究にとどまらない応仁・文明の乱の政治史研究として、高く評価されるものと思われる。

第三の成果は、応仁・文明の乱後から明応の政変にいたる段階の山名氏の動向を、惣領家・庶氏家の双方に注目して具体的に検討し、京都からそれぞれの分国に活動拠点を移すとともに、地域がもつ独自性に規定されて家ごとの動向の差異が大きくなることを示した点である。その知見を踏まえて、応仁・文明の乱後から明応の政変までの30年間を、戦国期にむけた「過渡期」として積極的に位置づけたことは、今後の研究動向に大きな意味をもつものと思われる。

本論文は、以上に述べたような優れた成果をあげたが、問題点がないわけではない。例えば、本論文では明徳の乱の政治過程を明らかにする際に、軍記物語の『明徳記』を積極的に用いているが、その史料学的検討は必ずしも十分とはいえないことや、將軍近習が守護被官になる要因や守護被官の「重臣」概念、室町幕府の「將軍権力」の理解については、さらに検討を深めていく必要があろう。とはいえ、こうした課題は、本論文の成果を踏まえて今後検討を重ねることで、明らかにされるものと思われる。

以上の理由から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。